ジョン・シャーカフスキーは「ニュー・ドキュメンツ」展（1967）で何を目指したか

同志社大学　山際 美優

本発表は、ニューヨーク近代美術館写真部門ディレクターのジョン・シャーカフスキー（John Szarkowski, 1925-2007）が、自身の企画した「ニュー・ドキュメンツ」展（1967）において、何を目指したかを明らかにするものである。

「ニュー・ドキュメンツ」展は、新世代のドキュメンタリー写真家の代表として、ダイアン・アーバス（Diane Arbus, 1923-1971）、リー・フリードランダー（Lee Friedlander, 1934- ）、ギャリー・ウィノグランド（Garry Winogrand, 1928-1984）を紹介した展覧会である。シャーカフスキーは、過去 10 年間のこれらの写真家たちが、ドキュメンタリー写真のアプローチを個人的な目的へと向けてきたと説明する。

同展は、前年に開催された「社会的風景に向かって」展（1966）を引き合いに出して語られることが多い。開催時期が近く、アーバスを除く 2 人が両展覧会に参加していること、どちらの展覧会もドキュメンタリー写真の新たな潮流を紹介することを目的としていることなどが、その理由としてあげられる。

それに対して、発表者はその違いに注目したい。すなわち、「ニュー・ドキュメンツ」展のみに参加したアーバスの存在である。他の 2 人と異なり、被写体が撮られることを意識した写真を撮影している点や、彼女のみが独立した展示室が設けられるなど、「ニュー・ドキュメンツ」展に限ってもその存在は特異なものであったといえる。では、シャーカフスキーは、3 人の写真家を組み合わせて展示することによって、何を目指したのだろうか。

一方で、2017 年に出版された同展の記録集によって、シャーカフスキーは元々展覧会に関連した「本」を制作・出版する予定であり、その執筆を、*A vision of Paris*（1963）という写真集の編集と序文執筆を担当した人物に依頼しようとしていた経緯が明らかとなった。*A vision of Paris* は、ウジェーヌ・アジェ（Jean-Eugène Atget, 1857-1927）の写真とマルセル・プルースト（Marcel Proust, 1871-1922）の文章を並置させて組み合わせた写真集である。シャーカフスキーは、「直感的」なアジェと、「ヘルメス的」なプルーストの、「一見辻褄の合わない」組み合わせに、「不思議な/深遠な対応」があるという点において同書を評価していた。

これらを鑑みることによって、「ニュー・ドキュメンツ」展は、「直感的」なウィノグランドとフリードランダーの写真に、「ヘルメス的」なアーバスの写真を組み合わせることがその趣旨であったと主張する。これにより、単なる「ドキュメンツ」としてではなく、異質な写真家を並置させることによる、その「不思議な/深遠な対応」 が目指されたものと結論づける。